ユーゴ連邦崩壊後の言語状況
―セルビア・クロアチア語圏を中心に―

三谷惠子

1.　はじめに

ユーゴスラビア社会主義連邦共和国 SFRJ（以下“旧ユーゴ”）が崩壊して 10 年が経過しようとしている。もともと多民族多言語社会であったこの地域では、言語の問題は常に政治の問題と連動し、民族の象徴としての言語の役割がさまざまな社会的文脈で議論されてきた。現在のセルビア・クロアチア語圏の言語状況は、混乱した社会状況を反映して実に錯綜した様相を呈している。ここでは‘民族の象徴としての言語’という視点から 90 年代後半のいくつかの動きについて述べ、言語と社会の関係を考えるための材料としたい。

2.　ツルナゴーラ語の誕生

90 年代初めに相次いで連邦を去ったスロヴェニア、クロアチア、マケドニア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナとは異なり、ツルナゴーラ（日本のメディアでは「モンテネグロ」だがここでは現地語の名称を用いる）は連邦にとどまり、セルビアに従う道を選んだように見えた。これを象徴するように、92 年の憲法でも《ツルナゴーラ人の言語はセルビア語である》と定められた･。しかし 95 年、V. ニクツェヴィッチが『ツルナゴーラ語正書法辞典(V. Nikcević;, 1995. *Pravopis crnogorskog jezika*)』を刊行し、96 年には国際ペンクラブ・ツルナゴーラセンターが『憲法におけるツルナゴーラ語の地位についての宣言(*Deklaracija crnogorskog P.E.N. centra o ustavnom položaju crnogorskog jezika*)を発表するにいたって、セルビア・クロアチア語の４つの‘変種’あるいは‘言語体 ’(Crystal 1997: 24)であったものは、ついに４つの言語 ―厳密には４通りの異なる名称を持つ言語―となる様相を呈し始めた。『宣言』は「今やすべてのスラヴ人の中で、自らの民族名でその使用言語を呼ぶことができないのはツルナゴーラ人だけ」であり、独自の言語文化と言語運用の実体を持つツルナゴーラ人の言語を「ツルナゴーラ語と呼んではならない理由は学術的にも政治的にもない」として、ツルナゴーラでの使用言語の名称を、憲法で正式に‘ツルナゴーラ語’と認めるよう訴えている。『宣言』は http://www. montenet. org/language/pen-decl.htm で読むことができる。

『宣言』が現れた背景には、ツルナゴーラの伝統的な《常にセルビアとともに、しかし従わず》という気概や、近年のセルビアとの必ずしも円満しごくというわけではない政治社会的関係、そして、旧ユーゴ諸国が独立しそれぞれが独自の形容詞を使用言語の名称に用いているという事実があっただろう。

旧ユーゴの言語状況を振り返れば、連邦構成民族の言語の権利平等という理

念があり、スロヴェニア、マケドニアなどの非セルビアクロアチア語圏の共和国では、民族言語が実質的にそれぞれの共和国の‘国語’の役割を果たしていた。しかし同時にこれらの言語は、連邦全体の枠内ではセルビア・クロアチア語という中央語＝威信言語に対する周辺語という立場に置かれていたのも事実である。ユーゴ崩壊の最初の直接的な契機の一つとなったヤンシャ事件･は、‘スロヴェニア語使用の権利’を掲げた実質的な反ユーゴキャンペーンであったが、これはまさに、旧ユーゴにおける《セルビア共和国対その他の共和国》の利害対立が《セルビア・クロアチア語対それ以外の言語》という言語対立に反映された象徴的な出来事だったといえるだろう。しかしこれらの言語はセルビア・クロアチア語とは‘純粋言語学的’に異なる言語であるという認識が定着していた（もちろん、言語方言学的にはクロアチア語とスロヴェニア語はカイ方言によって､セルビア語とマケドニア語はトルラク 方言によって連続する方言連続体・であり、これらが異なる言語であるという‘純粋言語学的’認知もまた、歴史的社会的事実に依拠した社会言語学的判断と無関係ではない）ので、ひとたび国家が政治的に分離独立すればそのまま言語もさしたる混乱もなく、独立国家の言語としての立場を獲得することができた。

これに比して、セルビア・クロアチア語圏の状況はさほど単純なものではなかった。言語学的には、この地域は全体として、いくつかの地域的方言を含む緊密な言語体と捉えることができる。その意味でこの地域の‘言語’は一つであり、その一つの言語の中に複数の民族が住み、それぞれの地域で慣習的に定まった地域-社会的方言を使用していると定義することができる。しかし言語を一つの社会制度と考えれば、実際の言語分布がどうであれ、国境が引かれることでその両側に別々の‘言語’が生まれる。やがてそこには実際に新たな等語線ができあがるだろう。また、言語は民族の象徴でもある。‘彼ら’とは違う‘我ら’という意識を持つ人々はたとえ一つの国家に属していても､そして実体としてはほとんど同じ言語を日常的に使用していても､‘彼ら’の言語と同じ言語を話しているとは認めないだろう。というわけで､旧ユーゴ体制の否定が民族国家の形成をめざす人々によって推進され実現された時､あらたに出現した独立国が民族国家に相応しい民族言語を主張したのは当然の理であった。他方で､もちろん､19 世紀に‘セルビア・クロアチア語’という名称を与えられた一つの言語連続体が国境を越えて存在するという言語的事実はそうやすやすと変更できるものではない。そこで民族国家の指導者やそれに追随する人々はまず、言語に自分たちの民族名を与えることから出発した。民族名を戴いた言語はその民族独自のものとなり、民族国家の象徴となる。まずは名称を与え、ついでそれに相応しい形式 ―音韻、文法、語彙の諸体系から成る規則の総体 ―を作り上げる、という手順である。かくして、分裂した国の数だけ言語が誕生することとなった。

3.　　‘誰の’言語か。

‘我らの（*naš*）’あるいは‘彼らの（*njihov*）’使用言語を何と呼ぶか、つまの‘どのような言語か(Kakav je jezik)’ではなく‘誰の言語か(Čiji je jezik）’という議論は、それ自体格別新しいものではない。旧ユーゴ時代だけを振り返ってみても、60 年代末期から 70 年代初めに起こった民族主義的な運動（クロアチアでは《クロアチアの春》と称する）の先鞭をつけるように、1967 年クロアチアで『クロアチア文章語の名称と立場についての宣言(*Deklaracija o nazivu i polož aju hrvatskoga knjiž evnog jezika*)』が出され、議論を呼んだ出来事が想起される。以来、セルビア側の主張によれば「クロアチアでは連邦制に対する分離主義の全般的な構想の中で、言語分離政策が体系的に進められてきた」（Ivic;1999）　のであった。86 年に刊行されたクロアチアの《文章語》三部作（『クロアチア文章語正書法辞典』[Anic;＆Silic;1986]、『クロアチア文章語造語法辞典』[Babic; 1986]），『クロアチア語文章語統語論 [Katičic;1986]』はまさに、その分離主義の‘集大成’であると他の連邦構成地域（特にセルビア）では受け取られた。‘セルビア・’なしのクロアチア語という名称の公式使用は、91 年のクロアチア独立によって、すくなくともクロアチアに住むクロアチア人にとっては当然の成りゆきとなったが、一方クロアチア国内に住むセルビア人にとっては、使用言語から自分たちの民族名が消えたことになり、NDH 時代の再来を象徴する事態となったわけである。

さて、クロアチアの場合には‘セルビア・クロアチア’という連名から一方の民族名を抹消することで自己同一性を実現させることができたが、もともと名称が登録されていなかったボスニア･の場合は、どうなっただろうか。独立国となったボスニアの言語について述べる前に、ここで旧ユーゴのセルビア・クロアチア語圏における言語の実体がどのようなものであったかを簡単に確認しておきたい。

セルビア・クロアチア語は《多極的言語 *polycentric language*》(Kloss 1967:31)、すなわち一つの言語共同体の中で標準語が単一の形式に決まらず、複数の異なる標準語変種によって実現される型の言語と規定された。セルビア・クロアチア語にはまず明確な二つの極、つまりベオグラードとザグレブを中心とするセルビア標準語とクロアチア標準語があり、両者の主たる違いは下のようにまとめられるものであった（形態音素や派生形態素、語彙などについては典型的な例のみを示してある）：

語彙	gledalac, čitalac kafa, Kuvati hastorija, muyika januar, februar	gledatelj, čitatelj kava, kuhati povijest, glayba siječanj, veljača
de 構文/不定詞	*Izvinite,ko je na telefonu?* *mogu da idem…*	*Oprostite,tko je pri telefonu?* *mogu ići…*

なお、本論著者はDmitrieva(1988) を援用して、語彙領域でのセルビア、クロアチアの両極化のタイプわけを試み(三谷1993)、クロアチアでのクロアチア一極化の傾向がさらに強まるだろうと指摘した･。その後の状況の中で、上記の表中のいわゆる閉じた体系である音韻、文法に関しては際立った変化は見られないが、語彙項目には多くのものを追加することができる。それらは基本的に、現代の発明品や外来の事物の名称など、つまりスラヴ語あるいはセルビア・クロアチア語の語彙項目に本来なく、日本語ではほとんどの場合が英語あるいは外国語のままとりいれられているもの（グレープフルーツ=limunika, ファックス=dalekopisač, ハードウエア=očvrsje, コンピュータ=računalo またはrednik, ファストフード=brzogrizなど、傑作は数限り無い）だが、その他、セルビア・クロアチア語に共通の語彙が既にあるにも拘わらず新たに別の名称を与えた事例も少なくない（洗濯機=perelica/vešmašina/, 冷蔵庫=hladnjak /frizžider/ そしてあまりにも有名なヘリコプター= vrtolet, vrtoplov, vrtilec, lebdoplov, vrtložnjak; samovrtjelica, zrakomlat）。むろんこれらの新機軸のすべてが定着したわけではない。しかしセルビア語とクロアチア語は確かにこうして多極性の中の対立する二つの極を形成する道を歩んで今日に至り、今後も分離することはあってもふたたび統合に向けて歩み寄ることはないだろうと思われる。

一方、ボスニア・ヘルツェゴヴィナとツルナゴーラの標準変種は、音韻的にはイエ方言でクロアチア語と共通し、その他の特徴はどちらかというとセルビア語に近いという中間的な特徴を持ち、そのために明確な極性を持った《標準語変種》ではなく《標準語的表現形式（Standarnojezični izrazi, standardsprachliche Ausdru/ck)》（Bugarski 1989: 60） という、いっそうあいまいな位置付けを与えられるものであった。90年代に入り、SFRJからの独立が明確になるに従って、この《標準語的表現形式》も当然のことながら、国家言語の地位に昇格することが明らかになった。そしてこの言語に対する名称として、ボスニア・ヘルツェゴヴィナでは《ボスニア語(bosanski[bošnjački] jezik)》あるいは《ボスニア・ムスリム語(bosanko[bošnjačko] muslimanski jezik)》あるいは《ボスニア・セルビア・クロアチア語(bosanskosrpskohrvatski〈 bosanskohrvatskosrpski jezik) 」など(組み合わせの可能性はさまざまあり、その選択は政治的立場を反映する)の名称が現れ始めた。連邦時代にムスリマンMusliman という独自の民族名を与えられ、ボスニア・ヘルツェゴヴィナという地域に民族的帰属意識を持つ人々にとってみれば、この地域が独立国家となる以上、セルビア人でもクロアチア人でもない自分達の使用言語が相変わらず‘セルビアクロアチア語’という他民族の名称で呼ばれるというのは理不尽な話である。だが、それなら彼等の使用言語をなんと命名したらよいのか。現実的な候補としてはムスリム語muslimanski jezik, 二通りのボスニア語つまりbosanki jezikとbošnjački jezik（強いて日本語に訳し分ければ後者は‘ボシニャク語’となる）が考えられた。

このうちまずムスリム語が、おそらくは二つの理由から、消えた。第一にムスリマンは、ティトー体制下でこの地域に伝統的に住む回教徒のスラヴ人に提供された民族籍であり、その使用の根拠であった体制が消滅した以上民族名もまた破棄されるべきものであった。第二に‘ムスリム=回教徒の言語’では、セネガル語でもインドネシア語でもよいことになってしまい、相変わらずボスニアの回教徒の象徴として相応しい名称にはなりえない。かくして、bosanski か bošnjački か、という問題となった。bosanski はいうまでもなく地名 Bosna に由来し、古くからそして連邦時代を通して、この地域の諸属性を表すために使用されてきた形容詞である。Bosna の語幹から、-ac という人を表す名詞を派生させる形態素を付して形成された「ボサナッツ bosanac」は、宗教や民族に関係なくボスニアに住む「ボスニア人」という漠然とした意味の語で、特別な政治的、宗教的な色彩を与えられることなく用いられてきた。一方の bošnjački は obšnjak（ボシニャク＝ボスニア人）から派生した形容詞で、この名詞も派生的には Bosna から、やはり人を表す名詞を派生させる形態素である-(j)ak を付して派生された語である。今日では、「ボシニャク」という名称は、1882 年から約 20 年間この地域を統治したカーライによって提唱された「ボスニア主義 Bošnjastvo」とただちに連結され、きわめて政治的な意図を持って 19 世紀末に作られた新語であるかのように考えられている向きもある。しかし「ボシニャク」という語そのものは、上記のような派生によってオスマン‐トルコ時代に現れた語で、Derviša Jakub-paše Bošnjaka (-1501), Ali-Dede Bošnjak (-1598) など、16 世紀の文人名にも現れている。この人名からも予想されるように、当初は非トルコ系のボスニア人を意味したと考えられ、オスマン帝国末期にはボスニアに住む非トルコ人全体をさして「ボシニャク-ミレト Bošnjak-millet」のようにも使用された(millet は本来、宗教的違いに対応してオスマン‐トルコが用いた行政上の区分だが、オスマン帝国末期には、文書上はしばしばこのように特定地域の住人を一まとめにして用いられることがあったという[EJ: Bosna i Hercegovina の項]）。もちろんこの時期にも、正教徒やカトリック教徒でないボスニア人（つまりは回教徒ボスニア人）をさして用いられることもあったが、いずれにしても元来は、とりたてて政治的な意味あいを持つ語ではなかったのである。従ってもし bosanski が「ボスニアの」であり、また bošnjački が元来の意味の「ボシニャク＝ボスニア人」から派生した「ボスニア人の」のままであったなら、今日のボスニアの言語を何と呼ぶかについては、どちらを用いてもそう大差ないことになるはずだった。しかし旧ユーゴからの分離独立そして内戦を経験する中でボシニャクという語は、単なる「ボスニアの住人」ではなく、この地域に帰属意識を持ち新たな独立国家を志向する回教徒、つまりは否定されたムスリマンの代替という地位を獲得していた。これには実は「ボシニャク」という語が負わされた歴史も深く関わっている。19 世紀半ばを過ぎて、ボスニアがオスマン‐トルコの支配からオーストリア=ハンガリー帝国の支配へ移行すると、この地域

の回教徒スラヴ人が‘セルビア人’なのか‘クロアチア人’なのか、という問題が、セルビアとクロアチアの対立のなかで浮上した。そこで上述したように、1883 年にボスニアの実質的な統治者となったオーストリア-ハンガリー帝国の蔵相、カーライ Kállay が「ボスニア主義」を提唱し、セルビア人ともクロアチア人とも異なる民族としての‘ボスニア人’という自覚を、特に当時の社会的上層にいた回教徒たちに持たせ、それによってセルビア、クロアチアからの介入を阻止し円滑な統治を実施しようと狙ったのである。この時カーライが新しい民族としての‘ボスニア人’の名称として採用したのが「ボシニャク」だった。この出来事の結果、「ボシニャク」という語は特別な歴史的含蓄のある語となり、カーライの時代が終わるとその含蓄を担ったまま 20 世紀のボスニア史の一隅に封じ込められることとなった。従って、今日的状況の中で、‘ムスリマン’に代わる名称が必要となった時、封印が解かれ、セルビアやクロアチアの介入を拒否する独立した「ボスニア人」のイメージを与えるこの語が蘇生したのは、当然のことであったともいえるだろう。何にせよ、こうなると bosanski とするか bošnjački とするかは、全くどちらでもよいという問題ではなくなる。1994 年 3 月に公布されたボスニア連邦 FBiH の憲法は、英文の表記で連邦の公用語を"ボスニャク語並びにクロアチア語(bosniac and croatian languages)" であると定め、この bosniac はまず非公式なクロアチア語で、bošnjački jezik と訳された。しかしその後、英文憲法が公式にクロアチア語に訳されるとそれはボスニア語 bosanski jezik とされて、これがボスニア・ヘルツェゴヴィナでの公用語の名称としてそのまま使用されるようになった。bošnjački が却下された経緯については、当時憲法制定会議の構成員の一人であったドディグが Dani132 号で言及している（Dodig 1999） が、要するに、英文とクロアチア語訳の対比検討をふくめ、どちらを採用すべきかに関しての明確な議論がないまま（bošnjački が bosanski の間違い、あるいはもとの英語の bosniac が bosnian の間違いだと思われて‘訂正’され、それが再訂正されなかったのかも知れない）bosanski という形でボスニア連邦の公報紙に発表されてしまったということらしい。ボシニャク（＝ボスニアの回教徒）の言語に bosanski という形容詞を用いることはしかし、ボシニャク人にもボスニアに住む非ボシニャク人にも、不満を残す結果となった。ボシニャク人の立場からすれば、自分達の民族名に対応する形容詞は bošnjački であり、Hrvat –hrvatski, Srbin – srpski , Bošnjak – bošnjački となって然るべきである。*bosanski* という、地名に由来する形容詞では結局のところ‘誰の’言葉なのかという点に関してあいまいなままなのである。他方、非ボシニャク人にとっては、bosanski という形容詞をボシニャク人がその言語名に使用することは‘ボシニャク人の言葉＝領土の言葉’、つまりは‘ボスニアの（もの）＝ボシニャク人の（もの）’という拡張主義を非ボシニャク人に押し付けることである。bošnjački であればそれはボシニャク人だけのものだから、bosanski マイナス bošnjački ± nebošnjački すなわち‘naš 我らの’部分が確保されるというものだ。

というわけで、ボスニアのボシニャク人の言語はボシニャク語bošnjački jezikとすべきだという意見は相変わらず後を断たず（Dani 132; 同様の見解はセルビア側からもクロアチア側からも示されている：Ivič; 1999; Dani 134）。現在のボスニアの混乱した状況にかんがみれば、ボシニャク語という名称が改めて採用されることもありうるかもしれない。

4.　新しい正書法

名称の問題に随伴して、実体の問題が現れる。ひとつの共同体、少なくとも行政的自立性を持つ単位では、言語計画 language planning は多かれ少なかれ必要な課題である。Wardhaugh (1986) は言語計画に「地位の計画(status planning)」と「総体の計画(corpus planning)」の二つの側面があると指摘している(Wardhaugh: 336)。「地位の計画」は言語にどのような地位（標準語や公用語といった公的な地位、あるいは逆に地域方言のような周辺的な地位)を与えるかという問題に関わるさまざまな計画で、社会制度や言語行使の権利、あるいは民族問題、対外関係などが広く関与すると考えられる。一方「総体の計画」は、言語とくに標準語の実体（語彙体系および文法や正書法などの規則）の整備に関わる計画である。3.でとりあげた‘誰の言語か’という問題はいわば言語に対する公的な資格付与の問題であり、「地位の計画」のまず第一項目に掲げられるような問題であろう。なによりもまず、当該言語を「何語とよぶか」が決まらなければ、前進することはできない。しかし言語計画の中で本当に重要な部分はもちろん、実体に関わる部分、つまり「総体の計画」にある。さて、旧セルビアクロアチア語圏のように、本来同じ一つの言語連続体に属し共通の言語文化を築いてきた地域の場合、名称において‘誰の’言語と呼ぼうが、実体としては‘彼らの’ものと同じであって不思議はないし、また運用上不都合もないはずである。しかし民族国家がそもそも‘彼らと異なる我ら’という意識を存在理由とする以上、その民族国家の看板であるべき‘我らの’使用言語もまた、‘彼らの’ものとどこか異なっていなければならず、しかもそれは国家的制度としてつまり標準語のレベルで示されなければならない。《民族主体主義 *naciokracizam* [natio-cracy]》(Vajzovic; 1998)の支配する社会では、このような動機づけによって、標準語制定の試みが始まる。ここでもし、標準語制定委員会のようなものが国家レベルで組織されれば、標準語のありかたはそこで決定されるだろうが、そのような組織化に至らない状況では、試みは個人の発意において着手される。以下に挙げるのはそのような個人的な試みではあるが、その試みが行われる社会的背景をかんがみに考察すると、個のレベルを越えた社会現象としての特徴が浮き上がってくる。

ボスニアでは1996年にハリロヴィッチの『ボスニア語正書法辞書』(Halilovič; 1996) が刊行された。その序文で著者は「不必要に従来の標準語の規範を変えることはない」と述べている。確かにここで提唱されている正書法上の細かい規則の変更

（dr. の . は不必要なので dr とする、など）や、従来より若干多いトルコ語からの借用語彙などは、個々に見れば言語の本質にかかわるような重大な事柄ではない。しかしそれらが微細な事柄であればある程、そこに著者の差異化の意図が働いているように思われる。著者の差異化の意図は、h-音の‘復活’に顕著にみてとることができる。新シト方言の多くの言語体では/h/(声門音の[h] あるいは口蓋垂摩擦音[X])が多くの語彙で脱落した（「軽い」の反映形は *CS.*lьgъkъ>lagk->lak. cf. rs. lëgkij, legko; slvn. lahek, lahko*）。しかしイストラ半島南西部やドゥブロヴニク附近の沿岸部、ツルナゴーラ西部、セルビア北東部などのシト方言と、大部分のボスニアの回教徒の言語体ではこの音が保たれ（*meki-mehki, truli - truhli*）、さらにもともと/h-/がない位置にも音韻添加が生じることがある：*rvanje - hrvanje*。これをハリロヴィッチは正書法上でボスニア語の標準形として‘復活’させたのである。

＜左の地図で白丸がこの特徴を持つボスニアの 回教徒言語体の分布、斜線の地区と黒丸 は同じ特徴を持つ非回教徒の方言分布。ただしこの分布はもちろん連邦時代のものである [Ivič: 1991: 94] ＞

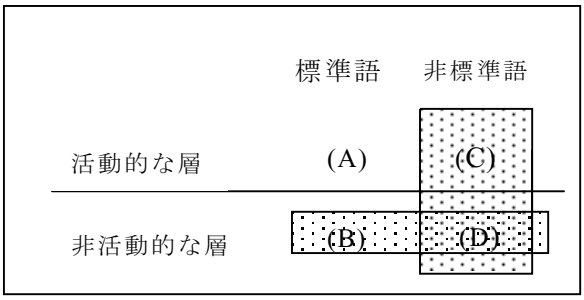
従来の非標準語形をあらたに標準語の基準にしようという意図は、冒頭に言及したニクツェヴィッチの『ツルナゴーラ語正書法』にも現れている。本稿筆者はこの『ツルナゴーラ語正書法』を見ていないので、間接的資料（インターネットの言語学メーリングリスト 1995 年 8 月 26 日付け Danko Sipka のメッセージ、ならびに Radio Most1998 年 4 月のニクツェヴィッチとセルビアの SANU セルビア語研究所のシチェパノヴィッチとの対談 ）から判断した範囲だが、こちらの『正書法』ではツルナゴーラ南部の方言であるゼート-南サンジャック方言（下の地図でツルナゴーラの南半分から東に続く濃い色の地域;[Ivič; & Brozovič;1988〉72-73]）の特徴である、硬口蓋歯茎摩擦音(s, z)の口蓋化を正書法に（というより文字に）反映させようとしているようである。つまり

標準語の文字と音素	s /s/	z /z/
標準語	[s]:[sutra]	[z]:[kozu]
zet-sandžački	[s^j]:[s^jutra]	[z^j]:[koz^ju]

の[s^j][z^j]を š,ž で表し、標準語形にしようといわけで、sutra「明日」 は śutra、kozu

「ヤギを」は *kozu* のようになる。

一つの言語体の状態を共時的に見た時、そこには４つの層、すなわち(A) すでに標準語の基準として採用され、かつ一般に広く運用されている形式、(B) 標準語の形式とされてはいるものの一般には運用されていない形式（すたれつつある形式、官庁用語など特殊な場合にしか用いられないもの等）、(C) 非標準語ではあるが、一般に広く運用されている形式（クロアチア語の za+不定詞で目的を表す言い方のような）、(D) 非標準語でかつ言語体全体として広く運用されてはいない形式（局所的方言要素、特殊な文体）が共存していると考えて良いだろう。
(A)(C)_は言語の活動的な層を、(B)(D)は非活動的なあるいは潜在的な層を形成する。



新しい標準語の基準を設定する場合、従来の形式(A) との差異化をはかる 必 要があるが、まったく当該言語になかった形式を唐突に‘創作’しても多くの言語使用者の支持を得ることは難しい。そこで(C) を積極的に認めたり、(B)(D)などから然るべき形式を発掘することが必要となる。この場合、その形式が当該言語体の言語に特徴的で、他の言語体から区別する有標の形式として広く認められているものだと効果的である。ボシニャク人の h-ハ音やツルナゴーラの口蓋化歯茎摩擦音は、彼ら独特の方言特徴としてよく知られた有標の形式で、この条件にかなったものということができる。

ボスニアにおける h-音の標準語への‘復権’はいち早く、ゼニツァで出版されたボスニア語の教科書（著者はペレシッチ-ムニノヴィッチ）に取り入れられているという。そこではボスニア語の正しい文は次のようになる：*Vaš jezik nije* ***lahak. Lahka*** *je lekcija. (Klajn 1998)*。しかし全体としては、標準語教育を受けてきたボスニア語話者は少なくとも現時点ではこの新機軸をさほど熱心に取り入れているようには見えない。ボスニアで現在発行されている定期刊行物にはまだ *lahko, mehki* のような形は見受けられないし、ゲッチンゲン大学のレーフェルト教授の『ボスニアの言語問題によせて Zur Sprachfrage in Bosnien』と題された講演（1999 年 10 月初めに、

ウィーン大学スラヴ学科が創設 150 周年を記念して『ウィーンとスラヴの諸言語文学』という主題で企画した 23 の特別講演の中の一つ）も「イゼトベゴヴィッチも *lahko* とは言わずに *lako* と話している」（Dani, 134）と指摘している。講演で同教授は、ハリロビッチの正書法の意義は認めながらも、「ボスニアにおける言語の‘ボシニャク化 bośnjakizacija’はクロアチアにおける‘クロアチア化kroacizacija ’ほど著しいものではないにしても、ボスニア語がボシニャク人だけの言語でなく、ボスニアに住む非ボシニャク人の為の言語であるためには人為的な規範の強要があってはならない」と警告している。

5.　‘彼ら’と‘我ら’

ボスニア内のセルビア人社会、クロアチア人社会も、本国と同じように民族国家の小型模型を形成し、民族中心主義によってそれぞれの本国をまねながらあるいはより急進的に、慣習的に受け継がれてきた言語体の実体を変えようとしている。現在、ボスニアのセルプスカ共和国(Srpska Republika)では、公共放送や学校教育にセルビア本国の標準語と同じエ方言が導入されているという。伝統的にイエ方言の地域であるボスニアでは、ボシニャク人もセルビア人もクロアチア人も昔からイエ方言で話してきたのであり、今も大部分の人はそのように話している。そのため、現在ボスニアのセルビア人社会は《話す時はイエ方言、聞く時はエ方言》という奇妙な言語二層使用（あるいはブガルスキー教授によれば‘言語的精神分裂症’）という状況にさらされている。また、ボスニアのクロアチア人社会はクロアチア本国と、セルビア人社会はセルビア本国と、それぞれ同じ教科書を用い、同じ標準語の基準を採用し同じ教育課程で授業を行っている。ザグレブ大学のプラニコヴィッチ教授は「彼らから、本国の同胞と同じであろうとする権利を奪うことは出来ないが、同じ一つの社会共同体においてこのような状況が恒常的に定着するとしたら、将来にさまざまな課題を残すことになる(Pranjković; 1999) 」だろうと指摘している。

教授の指摘は正しい。しかし言語の変化は時の流れの中の必然でもある。自然の変化以外に、人為的な要因に基づくものも少なくない。現在のクロアチア標準語はイエ方言だが、20 世紀前半までクロアチア、特にザグレブおよびその北西の、《もっともクロアチア的(najhrvatskiji》とザグレブ市民が誇らしげに語るフルヴァツカ=ザゴーリエ地方はエ方言が主流だった。反対にセルビア標準語はエ方言だが、セルビア西部にはもともとイエ方言の地域がかなりあったし、そもそもヴークが‘セルビア標準語’の手本として示したのはイエ方言であった（もしろんそれは東ヘルツェゴヴィナの方言だったが）。だが 20 世紀のユーゴの歴史 ―その中には標準語の制度化の過程も含まれる ―の中で、セルビアはエ方言を標準形として採用し、同時にセルビア内の大部分からイエ方言が消滅した。一方現在のザグレブ市民の大半は、あたかもはるか以前からこの町の人々がイエ方言で話してきたかのように思ってい

る。ボスニア内のさまざまな地域の言語体のありかたもこれからますます変化していくと予想されるが、それらを推進する力がどのようなものであるかはともかく、これもまた否応無しの一つの必然なのだろう。

さて、‘彼らと違う我ら’という排他的な主張が民族国家、民族言語を実現させる常套手段であることは、クロアチア、ボスニアの事実が証明し、またツルナゴーラでもその動きが見えている。しかし民族中心主義はそのような排他的傾向を持って現れるだけではない。 反対に‘我らと違う彼ら’の存在を否定することによって自己主張しようという場合もある。

セルビア人の作家や言語文化研究家十数名から成るグループが1998年8月、『セルビア語についての言葉(*slovo o srpskom jeziku*)』 と題された、セルビア語に関する‘宣言’をユーゴの有力誌*Politika* に発表した。セルビア語とセルビア民族に対する深い愛情に満ちたこの『言葉』によれば「シト方言の変種はすべてセルビア語」であり、この言語の使用者はみなセルビア人、より詳しくいえば「正教徒のセルビア人と、その他もともとのセルビア人すなわちカトリック教徒のセルビア人(!)ならびに回教徒のセルビア人(!!)」なのだという。クロアチア人(実はカトリック教徒のセルビア人) の主張するクロアチア標準語*hrvatski književni jezik* というのは、実際には「セルビア語のザグレブ方言」に過ぎず、ほんとうにクロアチア語といえるのはチャ方言のみ、従って現在のクロアチア人には、チャ方言の話者である固有のクロアチア人、クロアチア人と称しているが本来はセルビア人であるカトリック教徒、それにカイ方言の話者である《歴史的スロヴェニア人》の三通りがいるのだそうだ。『言葉』の発案者の一人でバニャ=ルカ大学哲学部セルビア語学科の助手、ヴライサヴリェヴィッチはまた、*Radio-Most* が企画したDz. ヤヒッチ(サラエヴォ大学哲学部、ボスニア-クロアチア-セルビア学科非常勤講師) との対談の中でも『言葉』の主張を繰り返し、「ボスニア語などというものは存在しない、なぜならボシニャク人あるいはボスニア人、そのほか何という名称で呼ぼうと、ボスニアに住む回教徒は民族起源的にセルビア人であり、セルビア人の言語はセルビア語でしかないからだ」と延べている。

一般的にいって、いくつかの異なる人種あるいは民族集団が、起源的には同一の結節的集団から枝別れしたものだということが人類系統学的に認められる事実であるとしても、そのことと、さまざまな文化や歴史の蓄積、記憶の総和として規定される‘民族’が単なる名称としてだけではなく実体として存在するという社会的事実は、次元の異なる問題である。この二つの異なる次元の問題を、しかも充分な学術的根拠も示さずに短絡的に結び付ければ荒唐無稽な主張になることは明白であろう。『言葉』の内容に対し学術的にコメントするのは「(以前にクロアチアで現れた)クロアチア＝アーリア人起源説にまともに反論するのと同じくらいばからしい (Matica Hrvatska の Bratulič 教授、私信) 」と冷笑されても仕方のないところで

ある。『言葉』が興味深いのはむしろ、その背後にあるもの、つまりこのようなあきらかに賢明とは言い難い主張を公表する人々の心理、それをあたかもまともな政治的議論の材料であるかのように提示するメデイア、さらにはこうした問題に人々を巻き込む社会状況などが相まって写し出されている点にある。『言葉』の主眼も結局は‘我らの’あるいは‘彼らの’言語を何と呼ぶかという点にあり、その判断基準は他の三つの共和国の場合と同じく‘民族が存在するならば民族の名称を持った言語も存在する’という単純なものである。だたしここでは、基本図式は否定の形式を加えて適応される：民族が存在しなければ（「セルビア人しかいない」）民族の名称を持った言語もない（「セルビア語しか存在しない」）。これを伝統的な大セルビア主義、あるいは旧ユーゴ時代の‘セルビア＝ユーゴ連邦’というセルビア中心主義の延長といってしまえばそれまでだが、90年代のユーゴ内戦を通してセルビアが置かれてきた状況 ―長い戦争の影響、深刻化するコソヴォ問題、国際社会での孤立化―という要因もあるのだろう。

『言葉』の発案者の中に、上記のヴライサヴリェヴィッチのように大学に籍を置くセルビア語学者のような、本来ならば冷静に現状に対処すべき専門的立場の人々がいる点も看過できない。もちろん、この勇ましい『言葉』に対して、セルビア内部から有識者による批判が出されていることも忘れてはならない。ピペルはマティツア・スルプスカの発行する言語問題の専門誌Jezik Danas で、このような主張がセルビアの人文学者全体のそれであるかのように受け取られることを危惧し、この種の主張が「セルビアの言語文化全体におよぼす悪影響」を指摘している（Piper 1998）.。しかしながら90年代末のコソヴォ紛争を通して再度高まってきた民族主義、そして昨年の空爆の後遺症など、セルビアの社会状況は不安定な要因を多く抱えている。このような状況下では、民族の象徴としての言語はまた、民族中心主義を擁護し正当化するための手段、対立する人々への抑圧の武器ともなる。『言葉』の発案者の一人、マロエヴィッチ R.Marojevič は、ロシア語学者として有名だが、同時にセルビアの名高い民族主義者シェシェリの率いる極右党の党員で、『言葉』の発表の2ヶ月後の98年10月、ベオグラード大学文学部の学部長に就任している。当然予想されるように、彼はただちに‘反セルビア主義’的な教授陣の追放と、学部の大改革（ロシア語を必修にするなど）を断行し始めた。当時の言語学科主任ブガルスキー教授は以前から、旧ユーゴ地域における政治問題化された言語状況や、武器としての言葉の使用を批判しつづけており（Bugarski 1994）、 セルビア主義者からは‘ユーゴ郷愁派’の烙印を押されていた人物だが、教授もマロエヴィッチによって、すでに取り決めてあった在職延長を一方的に破棄されかけた(ブガルスキー教授は98年に65才の定年を迎え、いずれにしても98年秋には言語学科主任の職を退く つ もり で いたと語っている。ただし後進の指導のため、さらに2年間教授として在職 す ることを学部から認められていた）。結局、ブガルスキーをはじめとする一連の‘反

体制的’教授陣の追放は、マロエヴィッチに反対する学生たちの示威行為によって撤回された。

6.　おわりに。

1999年9月、クロアチアのオシエクで第2回クロアチア国際スラヴィスト会議が開催された。94年の第1回プーラでの会議にくらべると参加者の総数は減ったがそれでも150名程度の報告が4日間にわたって行われた。しかしその中にユーゴスラヴィアからの参加者はいなかった。スラヴ圏で参加者がなかったのは他にベラルーシのみである。旧ユーゴが分裂して誕生した3つの国家（そして4つの言語）では困難な状況の中で、それぞれに言語文化の再建を模索しているように見える。しかし地理的にも歴史文化的にも密接な関係にあるこれらの地域は、相互協力なしには本当の意味で立ち直ることはできないだろう。クロアチアでもセルビアでも、新たな方言地図の作成や語源研究、中世文献資料の校訂や出版などが行われているが、これらのことは各国が別々に行っていても‘象’の姿は現れてこない。そもそも現在の国境で過去の文化を区分することなど、できるわけはない。そう考えると、この地域の再建はまだ着手にも至っていないように見受けられる。

＜引用文献＞

Anić V. & J. Silić. 1986. *Pravopis hrvatskoga književnog jezika*. Zagreb.

Babiž, S. 1986. *Tvorba riječi u hrvatskom književnom jeziku.* Zagreb. Globus.

Bugarski, R. 1994. *Jezik od rata do mira.* Beograd, Beogradski Krug.

—.　1989. "Sociolinguistische Aspekte der heutigen Serbokroatischen Standardsprache." *Die Welt der Slaven*. XXXIV 2. pp.259-273.

Crystal, D. 1997. *The Cambridge Encyclopedia of Language*. Cambrigde University Press.

Dodig, R. 1999. "Bošnjački ili Bosnaski." Dani, No.132.

EJ: *Enciklopedija Jugoslavija*. JAZU.

Halilović, S. 1996. *Pravopis bosanskog jezika*. Sarajevo.

Ivić, P. 1999. "Jezičko planiranje u srbiji danas." *Jezik Danas*, 1999. br.9.

—.　1991. *Iz istorije srpskohrvatskog jezika*. Beograd. Prosveta.

Ivić, P & D. Brozović. 1988. *Jezik, Srpskohrvatski/hrvatskosrpski, hrvatski ili srpski*. JAZU.

Katičić, R. 1986. *Sintaksa hrvatskoga književnog jezika.* Zagreb. Globus.

Klajn, I. 1998. "O jednom LAHKO napisanom udžbeniku." *Jezik Danas*, br.7.

Kloss, H. 1967. "«Abstand Laguages» and «Ausbau languages»." *Anthropological Linguistics.* Vol/.9, No7. 29-41.

Papić, M. 1991. "O srpskohrvatskom jeziku i pravopisu u Bosni i Hercegovini u periodu

Austrougarske okupacije (1878-1918)." Okuka M. & Lj. Stančić (red) *Književni jezik* u Bosni *i Hercegovini od Vuka Karadžića do kraja Austrougarske vladavine.* Slavica. 60-84.
Piper, P. 1998. "Ni jezici ni kulture nisu nedeljivi. (O '*deklaraciji*' o srpskom jeziku i filološkom srbovanju)." *Jezik Danas*, br.8.
Pranjković, I. 1999. "Teze o jezičnoj situaciji u BiH." *Vijenac*. br.7
Skok, P. 1971. *Etimologijski rječnik hrvatskoga ili srpskog jezika*. JAZU.
Vajzovic;, H. 1999. "Jezik kao osnovno sredstvo komuniciranja." *Dani*, 131
Wardhaugh, R. 1986. *An Introduction to Sociolinguistics*. Blackwell.
Дмитириева, П. А. 1988. "Некоторые особенности фунхционирования вариантной лесики сербохорватского / хорватосербского литературного языка в периодической печати СР Сербии и СР Хорватии." в Смирнов (ред.), *Функционирование славяікких* питературных языков в социалистическом обществе. АН СССР. М.:Наука. 225-255.
ЛЕ.1990.Пингвистческий энцилопедиский М.:Советская энциклопедия.
三谷惠子、1993『現在のクロアチア語について』スラブ研究, No.40. 75-96頁。

---

[1]ツルナゴーラで自分達の言語を「セルビア語」とよぶ伝統は長い。近代に限れば、ツルナゴーラで最初に作られた学校用文法書が「ツルナゴーラ青年のためのセルビア語文法(srpska grammatika,sastavlěna za crnogorsku mladež) 」である。これは1838年、ペタル2世(ニェゴシ)の命でミラコビッチ(D.Milaković)によって書かれた。これにつづくのも「ツルナゴーラ公国小学校3、4年生用セルビア語文法」(1900年、Spadijera, Đ)で、`セルビアクロアチア語'の名称が用いられるのは第二次大戦後である。

[2]1988年5月、連邦からの分離独立論が現実の様相を呈していたスロヴェニアで、`スロヴェニアが独立を宣言した場合にそなえてユーゴ連邦軍が軍事介入する準備をしている'という軍事資料をスロヴェニアの週刊誌Mladnaがスクープし、記事を発表したヤネス・ヤンシャはじめ4名のスロヴェニア人が軍事機密漏洩に関わったとして連邦軍事裁判にかけられることになった。これが「ヤンシャ事件」の起こりである。7月にリュブリアナで彼等に対する軍事裁判が開かれたが、その際、裁判はセルビアクロアチア語で行われ、スロヴェニア人被告に対してスロヴェニア語のできる弁護士がつけられなかった。この事態にスロヴェニア全体が猛反発し、当時スロヴェニア共和国共産主義者同盟の指導者であったクチャン(現スロヴェニア大統領)も「スロヴェニアは、母語の行使とその平等の権利が保証されないような国を自分達の国と認めることはできない」と、反連邦の立場を公に示した。

[3]カイ方言はクロアチア北西部からスロヴェニアにかけて使用される。疑問代名詞「何」に、標準クロアチア語、セルビア語とはちがうKajを用いることからこの名称がある。7母音体系(e,oに広い母音と狭い母音がある)、ž>r(možen>morem)の音変化、あるいは古い格語尾の保持などに顕著に現れるように、スロヴェニア語と共通する点が多く見られる。 トルラク方言Torlački dijalektはセル

ビアの南の、マケドニアおよびブルガリアに接する地域のシト方言の俗称で方言学上の名称としてはプリズレンー南モラヴァ方言が該当する。半母音があり、格体系の簡略化や不定詞に代わるda-構文の多用、後置冠詞等にあきらかにバルカン言語圏現象のつよい傾向が見られる。`トルラク'というのは地名ではなく、この方言の話し手を蔑んで用いられた語で、アラビア起源と考えられる(Skok, Torlakの項)

[4]ボスニア・ヘルツェゴヴィナで、土着の南スラヴ語に関する文法書が現れたのはオーストリア-ハンガリー帝国時代に入ってからである。この地ではヴーク・カラジッチの提唱した正書法や文法は、もともとヴークが東ヘルツェゴビナ方言を標準語の基礎としたことから、比較的抵抗なく受け入れられた。ヴークの方針を基礎に、1890年サラエヴォで最初の文法書が出版されたが、そのときの名称は「ボスニア語」である(Gramatica bosanskoga jezika)。著者は、サラエヴォのギムナジウ教師であったヴレティッチ(F.Vulctič)だが、出版された文法書には著者名が掲載されなかった。これについては、興味深いいきさつが伝えられている(以下、Papič69;EJ Gramaticaの項)。ヴレティッチは、一方ではスラヴィストの立場から、言語の実体としてセルビア語と異なる「ボスニア語」などという言語は存在しないと考えており、他方ではしかしこの地で使用される言葉を「ボスニア語」とする以外に代替がないことも自覚していた。結局、政府が命名した「ボスニア語文法」をそのまま容認したわけだが、出版に際しては著者名を出さないことを条件にしたという。自分自身のディレンマを匿名性という形に預けたのだろう。この文法書は1911年まで普及して用いられた。しかし1907年、現地政府が「この地の使用言語ーこれまで`ボスニア語bosanski jezikと称されてきた言語は、今後公式には例外なく'セルビア・クロアチア語'とする」という法令を出したことを受け、1908年の版から内容は同じながら「セルビアクロアチア語文法」として出版されることになった。以後の文法書は、チョロヴィッチ(Corović,V):Serbokroatische Grammatik(Bcrlin,Lcipzig,1913),シミッチ(Simić) Gramatika srpsko-hrvatskog jezika(Sarajevo,1916)と続く。

[5]セルビア語とクロアチア語の分離に関して、別のところで本稿筆者は数年前に、いずれヒンディー語とウルドゥー語のような関係になるのではないかと述べた。ヒンディー語とウルドゥー語は、周知のように、現在それぞれインドとパキスタンの公用語で、あたかも`異なった言語'のような様相を呈しているが、もともとはヒンドゥスタン語という同じ一つの`言語'(印欧語族の中のインドーイラン系語族、インド諸語の中の一言語)である。回教徒社会のヒンドゥスタン語が16世紀頃からペルシャ語などのアラビア系言語の影響を受け、多くの語彙を借用して言語としての自立性を獲得したのがウルドゥー語で、アラビア文字を使用する(当然、書方は右から左である)。一方インドのヒンドゥー教徒社会ではサンスクリット語から多くの語彙を採用し文章語を形成し、インド系文字(書方は左から右)を使用する。19世紀以後のそれぞれの文章語形成の過程で両者の差異は政治的配慮もあって意図的に拡大された。現在でも基本的な文法構造に違いはなく、インドではウルドゥー語はヒンディー語の`方言'とみなされているが、もっとも顕著な語彙的違いの他に若干の音韻や形態論的差異や語順の違いなどがみられるという①E538)。言語が使用される地域の文化、宗教、政治体制の違いが言語形成に反映されたという背景や、使用文字の違い、語彙および若干の音韻や文法

的差異などが次第に強調されていく状況などをかんがみると、セルビア語とクロアチア語、あるいはここにボスニア語も加えて、旧セルピアークロアチア語の将来を予見させる事例であるように思われる。